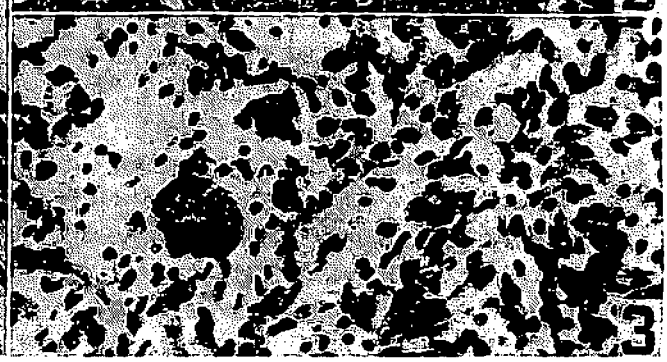
扁平上皮癌を伴つた猫の乳腺癌

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題　第8回獣医病理学研修会標本 No. 109



研修会が腫瘍学会の傾向を帯びて来たとの批判もあるが，1～2枚の標本で組織変化を論じ合うとすれば，それもまた意義のあることではなかろうか。さて前回に猫の乳腺癌を提出したが，今回はまた極めて多様性を示した猫の腹部皮下の腺癌に遭遇した。この猫も17才の雌で，長年にわたり分娩と泌乳とを繰返し，1966年夏頃腹部皮下の腫瘤が畜主に気付かれ，その後間もなく皮膚面から液体の流出が認められた。家庭薬が塗布されたが治癒せず，12月中旬教室に持参された。

腫瘤は左側乳房部皮下に位置し，鶏卵大の硬い隆起物として認められ，皮膚面に瘻管を形成し，不潔な液体を漏出していた。直ちに外科的に摘出。摘出材料はクルミ大で内部に空洞を形成し，不潔液をいれ，内壁は顆粒状である。摘出の翌日2匹の仔猫を流産した。

組織学的にこの腫瘤は第1図上部のごとく，クロマチンに乏しい，比較的大型の核を持つた上皮細胞から成る腫瘍で，ある部では乳頭状に腺腔内に増殖し，また他の部では著しい増殖によつて腺腔を完全に充し，更にまた腺腔が拡張して嚢胞を形成し，内に液体を充し，所によりコレステリンの沈着の見られる部分もある。壊死や出血を伴う所もある。乳管も拡張して液体を充し，所により石灰沈着も見られる。隔壁結合織も部位により肥厚している。

以上の腺上皮腫瘍に接して第2図のごとく扁平上皮も腫瘍化し，時に第1図下部に示すように癌真珠を形成している。

更に所により第3図のごとく巨細胞が認められ，その部にクロマチンに富む小型の円形または楕円形の細胞が目立つ。

なおこの動物は1967年夏斃死し，剖検したが転移は全く認められない。腺癌はその発生部位からみて乳腺癌と診断するのが妥当ではなかろうか。扁平上皮癌については犬の乳腺では，乳管上皮からの化生によることが記載されているが，猫については記録がないようである。また巨細胞の出現については，その部に見られる滲出細胞から炎症性のものと解すべきではなかろうか。

（第1，2図：×143，第3図：×360　いずれもヘマトキシリン・エオジン染色）